クラシックとの出会い

静岡県富士山世界遺産センター　館長
遠山 敦子

東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第10回は、文部省に女性初のキャリアとして入省、文化行政にも造詣が深く、文化庁長官、文部科学大臣、新国立劇場運営財団理事長などを歴任、現在も東京フィルの理事として楽団を支えてくださっている、遠山敦子氏に登場いただきます。

私がクラシック音楽に本格的に出会ったのは、1952年の初秋、中学2年生の時でした。その日、静岡市の公会堂で行われるヴァイオリンのコンサートに、ドキドキしながら出かけました。1年前に三重県から静岡へ転居したばかりの田舎者でしたが、世の中は戦後の混乱期からやっと落ち着きを見せ始めた頃でした。

舞台に現れたのは、若き日のアイザック・スターンでした。曲は、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲で、まるで天上の音楽のように私の心にしみ渡りました。のちに世界的な演奏家となる人とは、つゆ知らず、その音色に聞き惚れ夢見心地となった私は、帰宅後、早速蓄音機をおねだりして買ってもらいました。

ただ、レコードは自分のお小遣いで買うべきと思い、市内の有名なレコード店へ行って、どうしてもメンデルスゾーンのかの曲が欲しいのですが、と相談すると「お嬢さん、その曲はSPで3枚セットになっており、○○円です。」と言われました。その日の私の財布の中身は不十分でした。でも、このまま帰るのは残念と思い、勇気を出して「どうしても欲しいので、来月必ず買いに来ますから今日は1枚だけ頂けませんか。」と交渉してみました。多分呆れながら、よくぞ応じてくれ結果的に3か月かけてハイフェッツの“メンコン”を手に入れました。

2017（平成29）年の開館時より館長をつとめている「静岡県富士山世界遺産センター」は、2013年6月に世界文化遺産に登録された「富士山」の普遍的価値を広め、後世にその美しさを守り伝えるための拠点施設。海外からも数多くの来訪者があります。

その後は、兄を説得して二人分のお小遣いで、『モルダウ』、『新世界』、『冬の旅』などを導入として、次第に奥深いクラシックの世界に入り込みました。

そのモルダウですが、今年の東京フィルのニューイヤーコンサートで、会場からの希望を募り演奏される曲に選ばれ、私は、若き日の出来事を懐かしく思い出しました。しかも去る3月には、ミハイル・プレトニョフの指揮で、スメタナの『わが祖国』全曲が演奏され、モルダウは、格別美しく響きました。その指揮者は、自らの祖国の振る舞いを憂いつつも、万感の思いをこめてタクトを振られたのではと推察します。

クラシック音楽は、人間の苦悩や哀しみには心に安寧を与え、感興を得たいときには、それに応える力があります。私は、新国立劇場運営財団理事長の時、東京フィルハーモニーに出会い、今もその調べの妙なることを願い応援しています。

遠山敦子（とおやま・あつこ）
東京大学法学部卒後、1962年文部省（当時）に初の女性キャリアとして入省。文化庁次長、教育助成局長、高等教育局長、文化庁長官を歴任。文化庁次長の時、新国立劇場の建設のため奔走。駐トルコ共和国日本大使、文部科学大臣、（公財）新国立劇場運営財団理事長、（公財）トヨタ財団理事長（現在は顧問）を歴任。2017（平成29）年より静岡県富士山世界遺産センター館長。
2004（平成16）年より公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 理事。